

積の形の函数による近似

一松 信 (立教大理)

1. 問題のおこり

この問題はまた手をつけ始めをばかりで、未言或まもの
であるが、中間報告として現状ものをい

問題は2変数の函数 $\varphi(x, y)$ を 積の形の函数

$$(1) \quad f(x) \cdot g(y)$$

によって近似しようということである。函数が x, y について
対称なときには、 $f(x) \cdot f(y)$ の形による近似も考えられる。

これは一見いさゝか無茶な問題である。分離形の函数に
よる級数 $\sum f_i(x) \cdot g_i(y)$ が近似することは、古くから実用
にされているが、たゞ一項では、たいていの場合よい近似は
えられないう—たとえ近似度のよくないことを承知で
最良近似も^純理論的に求めることを試みるにしても、——

ことのおこりは次のとおりである。BROOKHAVEN 研究所に
留学中 (1967年3月頃)、応用数学部長を通じて、つぎのよ
うな問題をもちこまれた。長方形領域で、 $\Delta u = \rho$ とか
 $\Delta u + \kappa u = 0$ を簡単な境界値 (たとえば0) でとくとき
るのとき 解を $u = f(x) \cdot g(y)$ の形に仮定し、まず $g(y)$

を適当に仮定し、 $y=y_0$ を中央付近に固定して、問題を $f(x)$ に関する常微分方程式に直す。その解 $f(x)$ を仮定して、次には $g(y)$ に関する常微分方程式に直してとく。これを数回反復すると、かなり早くとも y も収束し、しかもその解 $f(x) \cdot g(y)$ は、真の解 $\alpha(x, y)$ にかかなり近い。このような一種の ADI (交互方向反復法) の数学的基礎づけを求めたい。

f, g が収束することも数学の問題として興味あるが、それよりも、このような一見勝手の仮定が、実用上十分に使えるような近似解を導くことに興味をひかれた。この場合の真の解が、(1) の形の函数で十分によく近似できる性格のものであるのか。とすればそのような性格とは何であるのか？

じつはこの場合、 L_∞ のノルムでの最良近似を論じてみたかった (これは現在でも私にとって宿題になっている)。しかしこれまでの最良近似の理論は、すべて近似すべき函数の族が有限次元であることが本質的に使われている。——じつは有限次元でなくてもよいが、単位球が弱位相でコンパクト、したがって空間が再歸的 (反射的) な Banach 空間でないと、そのままでは適用し難く、再歸的でない空間 C には通用しない。それが L_2 の近似、すなわち 最小二乗近似 としたところ、一つの結果がえられたので、報告する次第である。

当面の問題は つぎのとおりである。

1° 区間 $I = \{a \leq x \leq b, c \leq y \leq d\}$ で L_2 に属する $\varphi(x, y)$
(とくに連続函数) があるとき, $L_2(a, b) \ni f, L_2(c, d) \ni g$
をみつけて, 差の L_2 ノルム

$$(2) \quad \iint_I |\varphi(x, y) - f(x) \cdot g(y)|^2 dx dy$$

を最小にせよ. — 函数値は複素数値でも同様に行きうるが
ここではすべて 実数値 とする.

この離散近似として, つぎの問題も考えられる.

2° 二重数列 $\alpha_{ij}, i=1, \dots, m; j=1, \dots, n$ に対して,
数列 $\{a_i\}_{i=1, \dots, m}; \{b_j\}_{j=1, \dots, n}$ を求め, l_2 ノルム

$$(3) \quad \sum_{i,j} |\alpha_{ij} - a_i \cdot b_j|^2$$

を最小にせよ.

とくに対称の場合 (1° では $a=c, b=d, \varphi(x, y) = \varphi(y, x)$;
2° では $m=n, \alpha_{ij} = \alpha_{ji}$) には, $f(x) = g(x), b_j = a_j$ と
した場合が考えられる. これをそれぞれ, 1', 2' として引
用することにする. 対称な場合, いっせいに興味あるのは,
正の準定符号の場合である.

2. 離散の場合の解

まず“対称な場合”を考える。目的関数

$$\sigma(a_1, \dots, a_n) = \sum_{i,j} (\alpha_{ij} - a_i a_j)^2$$

の最小値を与える必要条件として $\partial\sigma/\partial a_i = 0$ ($i=1, \dots, n$)

を考えると、直接の計算でこの式は

$$(4) \quad \sum_{j=1}^n \alpha_{ij} a_j = \left(\sum_{j=1}^n a_j^2 \right) a_i \quad (i=1, \dots, n)$$

となる。これは

$$(5) \quad \sum_{j=1}^n a_j^2 = \lambda$$

とおくと、 λ が対称行列 (α_{ij}) の固有値、 (a_i) がそれに対する固有ベクトルを意味し、このとき

$$\sigma(a_1, \dots, a_n) = \sum_{i,j} \alpha_{ij}^2 - \lambda^2 = \sum_{\mu \neq \lambda} \mu^2$$

となる。ただし μ は λ 以外の固有値である。 a_i が実数とすれば $\lambda \geq 0$ (もし a_i が 0 ベクトルでなければ $\lambda > 0$) が要求される。じつさいならば $\lambda < 0$ 、すなわち (α_{ij}) が負の定符号であれば $a_i = 0$ のときが最小になる。

対称でない一般の場合には、目的関数 σ を $a_1, \dots, a_m, b_1, \dots, b_n$ の関数として、 $\partial\sigma/\partial a_i = 0$, $\partial\sigma/\partial b_j = 0$ を作ると

$$(6) \quad \sum_{j=1}^n b_j \alpha_{ij} = \mu a_i, \quad \mu = \sum_{j=1}^n b_j^2$$

$$\sum_{i=1}^m a_i \alpha_{ij} = \lambda b_j, \quad \lambda = \sum_{i=1}^m a_i^2$$

となり、これから

$$(7) \quad \sum_{j=1}^n b_j \beta_{jk} = \lambda \mu \alpha_k, \quad \beta_{jk} = \sum_{i=1}^m \alpha_{ij} \alpha_{ik}$$

$$\sum_{i=1}^m a_i \gamma_{ik} = \lambda \mu \alpha_k, \quad \gamma_{ik} = \sum_{j=1}^n \alpha_{ij} \alpha_{kj}$$

さうる。すなわち $\nu = \lambda \mu$ は正の半定符号行列 $A'A$, AA' の固有値であり, (a_i) , (b_i) はそれぞれの固有ベクトルで,

$$(8) \quad \sum a_i^2 \cdot \sum b_j^2 = \nu$$

と標準化されたものである。しかもこのとき

$$\sigma = \sum \alpha_{ij}^2 - \nu, \quad \nu = \lambda \mu$$

であるから, ν が $A'A$, AA' の最大の固有値のとき, σ は最小となる。 λ, μ は積 $\lambda \mu$ の形としてのみ意味がある。—それは (a_i) に c , (b_j) に $1/c$ を乗じてもよいからである。

以上をまとめ、次の結果をうる。

定理 1 対称な場合, (α_{ij}) が負の半定符号ならば, $a_i = 0$ が最小二乗近似である。そうでなければ, 正の最大の固有値を λ_0 , それに対する固有ベクトル (a_i) を (5) のように標準化したとき, (±の符号だけの自由度を除いて)

系1 $\lambda_0 > 0$ のとき解が (符号を除いて) 一意であるための必要十分条件は, λ_0 が単一固有値であることである.

系2 この近似が正確, すなわち $\alpha_{ij} = a_i \cdot a_j$ となるための必要十分条件は (α_{ij}) がただ1つの正の固有値 λ_0 をもち, 他の $(n-1)$ 個の固有値が 0 になることである.

定理2 一般の問題2に対して 正の半定符号行列 AA' , $A'A$ ($A = (\alpha_{ij})$, A' は転置行列) の最大の固有値 λ とし, それぞれの固有ベクトル $(a_i), (b_j)$ を (8) のように標準化したものが所要の最小二乗近似を与える. このときには, 0 以外の固有値は AA' , $A'A$ に (重複度もこめて) 一致する. λ が単一固有値ならば, a_i, b_j は定数倍を除いて, 一意に定まる.

以上の考察から, 対称な場合には A , 一般の場合には $A'A$, AA' が, 正の最大の固有値を一つもち, 他の固有値が 0 に近ければ, このような種の形での近似がかなりよいであろうと推察される.

3. 連続変数の場合

2. の場合と同様に問題 2 の場合と同様にして、つぎのような結果がえられる。

対称な場合には、 $L_2 \rightarrow L_2$ の連続写像

$$(\Phi l)(x) = \int_a^b \varphi(x, y) l(y) dy$$

を作る。 $\varphi(x, y)$ が連続ならば、 Φ は完全連続 (コンパクト)

で、そのスペクトルは点スペクトル (固有値) のみである。

Φ が少なくとも一つ正の固有値 λ

$$\Phi l = \lambda l$$

をもてば、正の最大の固有値 λ_0 があり、それに対する固有函数 $f(x)$ を

$$(9) \quad \int_a^b (f(x))^2 dx = \lambda_0$$

と標準化したとき、 $f(x)$ が最小二乗近似を与える。もし Φ

の固有値がすべて ≤ 0 ならば、0 が最小二乗近似である。

一般の場合には、 φ を反復して、連続写像

$$(10) \quad (\Phi_1 l)(x) = \int_c^d \varphi(x, y) \left[\int_a^b \varphi(z, y) l(z) dz \right] dy$$

$$(\Phi_2 l)(y) = \int_a^b \varphi(x, y) \left[\int_c^d \varphi(x, z) l(z) dz \right] dx$$

を作る。もし φ が連続ならば、 Φ_1, Φ_2 は完全連続で、両者

は 0 以外は同一の固有値をもち、最大の正の固有値 ν に対するそれぞれの固有函数 $f(x)$, $g(y)$ を

$$(11) \quad \int_a^b (f(x))^2 dx \cdot \int_c^d (g(y))^2 dy = \nu$$

と標準化したものが、所要の最小二乗近似を与える。 ν が単一固有値ならば、 f , g は $f \rightarrow cf$, $g \rightarrow g/c$ (c は 0 でない定数) という変換を除いて、一意的に定まる。

この場合も近似が正確であるための必要十分条件は、 Φ (Φ_1, Φ_2) がただ一つ正の固有値をもち、他がすべて 0 であることである。 Φ (Φ_1, Φ_2) の一つの固有値が十分に大きく、他の固有値が小さければ、近似はかぎりよいはずである。

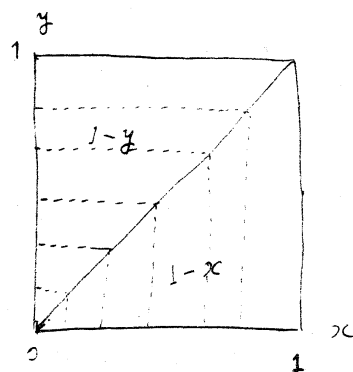
冒頭にのびた偏微分方程式 $\Delta u + p$ の場合、境界値 = 0 の下で数値的に計算してみた限りでは、最大固有値が他にくらべて圧倒的に大きい、という状況がおこっていた。したがって固有函数展開の第 1 項にあたる種の形一つだけで、十分よく近似できたことがうなづける。しかしこれだけではなお不完全で、固有値を計算しなくても、その評価から、上記のような状況がどのような問題に対していえるのか、前もって判定するような方法がほしい (これも私の宿題である)。

4. 一つの例

いかにも人工的の例であるが、解析的にきれいな答が与えられた一例をあげる。^{これは}対称な場合である。

$0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1$ において

$$\varphi(x, y) = \min(1-x, 1-y)$$



を近似する。この等高線は折れ線であり、曲面はピラミッドの1/4になる。

これは対称におりかえし、 $-1 \leq x \leq 1, -1 \leq y \leq 1$ で境界値0の偶函数としてよい。固有方程式は

$$\lambda f(x) = \int_0^x (1-x) f(y) dy + \int_x^1 (1-y) f(y) dy$$

である。これを2回微分すると(右辺の形から微分可能なことかわかり、その形からもう一回微分できることかわかり)

$$\lambda f''(x) + f(x) = 0$$

となる。この偶函数の解は

$$f(x) = \cos(x/\sqrt{\lambda})$$

であり、 $x = \pm 1$ で0になるという境界条件から

$$1/\sqrt{\lambda} = \pi(n+1/2) \quad (n=0, 1, 2, \dots)$$

つまり

$$\lambda = 1/[\pi^2(n+1/2)^2]$$

である。最大の固有値は $n=0$ にはある $4/\pi^2$ で、つまり

は $4/9\pi^2$, $4/25\pi^2$, ... とあり、2番目との比は7であ
る。したがって、17番の最小二乗近似は (9) により

$$f(x) = \frac{2\sqrt{2}}{\pi} \cos \frac{\pi x}{2}$$

であり、残差ノルム λ は

$$\begin{aligned} \int_0^1 \int_0^1 (\varphi(x, y) - f(x) \cdot f(y))^2 dx dy &= \int_0^1 \int_0^1 (\varphi(x, y))^2 dx dy - \lambda^2 \\ &= \frac{1}{8} - \frac{16}{\pi^4} \doteq 0.00241 \end{aligned}$$

である。また $|\varphi(x, y) - f(x) \cdot f(y)|$ (全体の値の最大は $x=y=0$
で起こる) の値は

$$1 - (8/\pi^2) \doteq 0.1894$$

である。—— これはむしろ意外により近い近似である。そして
(0, 0) のごく近くを除けば、誤差は 0.1 以下である。

$[0, 1]$ を N 等分した離散的な分点に対する φ の値を α_{ij} と
したときの固有値も計算することができ、最大固有値は、 N
 $\rightarrow \infty$ のとき $4/\pi^2$ に収束する。

この結果は、楕圓処理、1968年1月号に発表予定であるが、
前記の「宿題」について、いままじし考察を深めてまとめてみた
かと考えている。